

南四国における弥生集落の成立と展開

——香長平野とその周辺部を中心として——

出原 恵 三

(高知県埋蔵文化財センター)

1. はじめに

南四国における弥生時代の遺跡は、物部川流域や仁淀川流域の平野部、わけても県中央部の香長平野とその周辺部に集中しているところに分布上の特徴を見出すことができる。縄文時代遺跡のおおよそ7割が四万十川流域や西南部の海岸部、所謂幡多地域に分布しているのに比べると極めて対称的な現象であると言えよう。これは集落遺跡の展開についてもそのまま当てはめることができる。

南四国における弥生時代の研究は、戦後一貫して岡本健児氏によって精力的に進められて来たが、その内容は土器や石器、青銅器などの編年や分布論など遺物を中心としたものであった。この原因は、他地域に較べて集落实態を把握するに足りる面的な調査、言わば大規模調査の事例に恵まれなかったことにある。しかしながら1980年代以降に本格化した緊急発掘調査例の増加は、集落の具体像に迫ることが可能な資料の蓄積がなされつつある。

南四国は前面に太平洋、背後は険しい四国山地によって遮られているところから一見孤立的な地域として、また歴史時代以降「遠流」の地としての位置付けがなされたことにも原因して、後進的な地域として認識されてきたことは否めない。しかしながら弥生文化について見れば、意外にも成立の当初から豊かな内容を有しており、後期前葉には田村遺跡に見られるような西日本屈指の拠点集落へと成長を遂げるのである。

集落遺跡の調査事例が増加したとは言え、全体像を明らかにし得た例には、まだまだ僅少であるが、香長平野とその周辺部においては、弥生文化の成立期から後期末、古墳時代初頭頃までの変遷と諸画期について一応の見通しを持つことが可能となった。そしてそれは、遺跡立地や竪穴住居など集落を構成する諸遺構においても興味深い変化を伴っている。これまで西日本の太平洋側の弥生集落の動向は、瀬戸内や近畿に較べてほとんど知られていなかった。ここで、南四国の集落の動向について整理しておくことは、今後、西日本の弥生時代社会の研究を深める為にも意味のあることと思う。尚、時間軸については以下の様に大きく4区分したい。(1) 弥生時代前期初頭～中葉 (2) 前期後葉～中期中葉 (3) 中期後葉～後期中葉 (4) 後期後葉～古墳時代初頭である。これを南四国の土器編年¹⁾との併行関係で示せば、(1)はI-1～3期、(2) I-4～Ⅲ期、(3) IV～V-4期、(4)はV-5～Ⅵ期と古式土師器I期²⁾に該当する。

2. 弥生集落の成立と展開

(1) 前期初頭～前期中葉の集落

南四国における最古の弥生集落は田村遺跡に成立する。当遺跡は、香長平野の中央部に位置し物部川右岸の自然堤防上に立地しており、後述するように中・後期に至って南四国最大の拠点集落として展開する。当該期の集落は、前期初頭（I-1期）と前期前・中葉（I-1・2期）とで地点を違えて展開する。前者の集落は、田村遺跡の中で最も南部に位置し標高6m前後、現在の海岸線からの直線距離は3km程である。

前期初頭の集落が形成される時期の地形環境は、前面に閉塞性の潟湖、土佐潟³⁾が広がっており物部川は幾つかの流露となって流れ込んでいた。前期初頭の集落は、潟湖に臨む自然堤防上に立地している。この集落についてはすでに何度か紹介をしているので⁴⁾、ここでは要約して述べることにする。当集落は1983年に検出したが、それまで厚いヴェールに閉ざされていた弥生文化成立期の集落遺跡の全体像を把握し得た最初の例として注目されている。集落の範囲は27000m²を有し、自然堤防上の縁辺部に10棟の竪穴住居が弧状に配置され居住空間の外縁部が形成される。その内側には大小15棟の掘立柱建物が並び、さらに内側は中央広場となっており、壺棺や土坑墓を含む土坑が分布している。求心構造を持つ集落址であり、形態的には縄文モデルムラそのものである。竪穴住居は大・中型と小型からなっており各々5棟である。しかも両者は位置関係から見て1対の関係にあることが判る。また大・中型のすべてがいわゆる松菊里型住居であることも注目しなければならない。掘立柱建物には柱穴の大きさや柱間から高床式倉庫と考えられるものが3棟と住居あるいは簡単な小屋として捉えられるものが12棟見られる。後者の中で住居と考えられるもののうち4棟には長軸或いは短軸に平行する溝状土坑が伴っている。これらの諸遺構は、出土土器から見て掘立柱建物の一部に切り合い関係が認められるものの短期間のうちに営まれ廃絶されている。

田村遺跡の例と時期的に比較的近接している事例としては福岡県の江辻遺跡⁵⁾を挙げることができよう。両者の共通点は、松菊里型の竪穴住居と掘立柱建物で構成されていることや一定の救心構造を持っていることである。相違点としては、竪穴住居の床面積が田村例の大・中型が30～40m²以上であるのに対して江辻例は総じて20m²前後と小型であることや江辻遺跡では2棟1対のまとまりを確認できないこと、また掘立柱建物に溝状土坑が伴わないことなどを指摘することができる。

田村遺跡からは縄文中期の船元式土器が1例、後期中葉に到るとまとまった遺物が出土していることから、後期中葉頃には本格的な集落の形成が始まったものと考えられる。後期の層準からはイネ・ソバの花粉が検出されており⁶⁾、農耕を伴う生業活動が行われていたのである。しかしながら晩期の遺物遺構は皆無であり、この前期初頭の集落が晩期集落と如何なる関係を有していたのか。今後追究していかなければならない課題である。

続く前期前・中葉の集落は、初頭の集落の北400m程の西見当地区を中心に展開する。標高も7～8mと高い位置にある。1976年に環濠の存在が確認され⁷⁾、1982年にはその圍繞する範囲と環濠の規模が明らかとなった⁸⁾。環濠は自然堤防の東に向かって開口する半円形をなし断面形はVまたはU字形、幅1.6～2.1m、深さは1m前後で、開口部両端の距離は約140m、環濠内の面積は17500m²である。環濠が掘削された時期を明らかにすることはできないが、埋土中層からI-2期の土器が多量出土していることからI-2期またはI-3期に掘削されI-3期の内に埋没している。何れにしても短期間しか機能していなかった。1996年からの調査によって環濠内の約半分および環濠の周

辺部の調査が行われ環濠集落の実体がほぼ掴めて来た。詳細は報告書の刊行を待たなければ成らないが、環濠の内外には少なく見積もっても100基以上の貯蔵穴と考えられる土坑が設けられており、環濠内は前期I-2・3期の多量の貯蔵穴で占められており竪穴住居は環濠の外に営まれていること、従来の環濠の外側にもう一つの環濠＝外濠が巡ることも明らかとなった。初頭の集落と比較した場合、掘立柱建物が認められないこと、逆に初頭の集落には認められなかった貯蔵穴が多量に設けられていることなどの特徴を挙げることができよう。この他、前葉の集落は、先に見た初頭の集落と谷状地形を隔てた西方の地点から貯蔵穴と考えられる土坑と掘立柱建物が確認されている。

田村遺跡以外の前期前葉の遺跡は、仁ノ遺跡や居徳遺跡、八田神母谷遺跡、銀杏の木遺跡などを挙げることができるが、何れも遺構は確認されていない。これらの内、居徳遺跡と八田神母谷遺跡では、晩期土器と弥生前期前葉の土器と共存している。中葉の遺跡も少ないが、西分増井遺跡では松菊里型の竪穴住居が1棟検出されている⁹⁾。

(2) 前期後葉～中期中頃

前期後葉になると集落址が飛躍的に増加する。田村遺跡や西分増井遺跡のように中葉から継続する遺跡もあるが、多くは当該期から新たに開始される例が多い。また美良布遺跡や下分遠崎遺跡などのように河川の中・上流域にまで分布が認められるようになるのも当該期の特徴である。

田村遺跡では、前期後葉には集落が大きく二分される。一つの集落は前・中葉の集落と一部重複しながら北側に展開していたことが遺物の散布状態から窺い知ることができるが、明確な遺構の検出は少ない。もう一方は、800m程南に展開している。ここからは、4棟の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝が検出されている¹⁰⁾。竪穴住居は調査区の南と北に分かれて存在し、それぞれ大型住居と小型住居が1対となって営まれている。北群(S T 2・4)と南群(S T 5・6)との距離は40m、大型住居と小型住居との間隔は両者とも8m前後である。掘立柱建物は北群に接して2棟、調査区中央部に1棟が配されている。土坑は40基以上検出されているが、前代のように環濠に囲繞された状態は示さない。これらの内S K 2からは大型砥石が、S K 14からはチャートのフレイク、チップ類が3000点以上出土していることから工房と考えられる。また南群のS T 6に近接するS K 26・38・39・40は、位置関係から見て南群の竪穴住居に付属する貯蔵穴と考えられる。北群の竪穴住居に貯蔵穴が全く伴わないのは掘立柱建物がその機能を果たしていた可能性がある。この調査区の面積は6730㎡であるが、遺構の分布や周囲の状況から判断して、集落の居住空間としてはこれ以上広がらないと考えられる。従って先行期の集落に較べると小規模な集落と言えよう。しかし初頭の集落で認められた竪穴住居の大・小1対の関係はここでも維持されている。

西分増井遺跡からは長軸7.5mを測る不整形の竪穴住居が1棟と直径5m前後と推定される小型住居が2棟検出されている。後者の1棟は前者と近接しており、ここでも大型住居と小型住居の2棟1対の可能性を想定することができる。

香宗川右岸の低湿地に立地する下分遠崎遺跡は、木製品や自然遺物の出土で注目されている遺跡であるが、前期末に属する掘立柱建物を3棟検出している。これらの建物は、田村遺跡の前期初頭の例に較べると小規模であり、付属の溝状土坑は認められない。

中期前葉～中葉にかけての集落は、口ミノヲ遺跡を除くと前期末葉から継続する遺跡である。しかしながらその内容は、前期末以上に不明な点が多い。特に中期前葉については、遺物は一定量認められるものの検出遺構は極めて少ない。田村遺跡においても僅かに土坑が2基、下分遠崎遺跡で



図1. 南四国(高知県)位置図

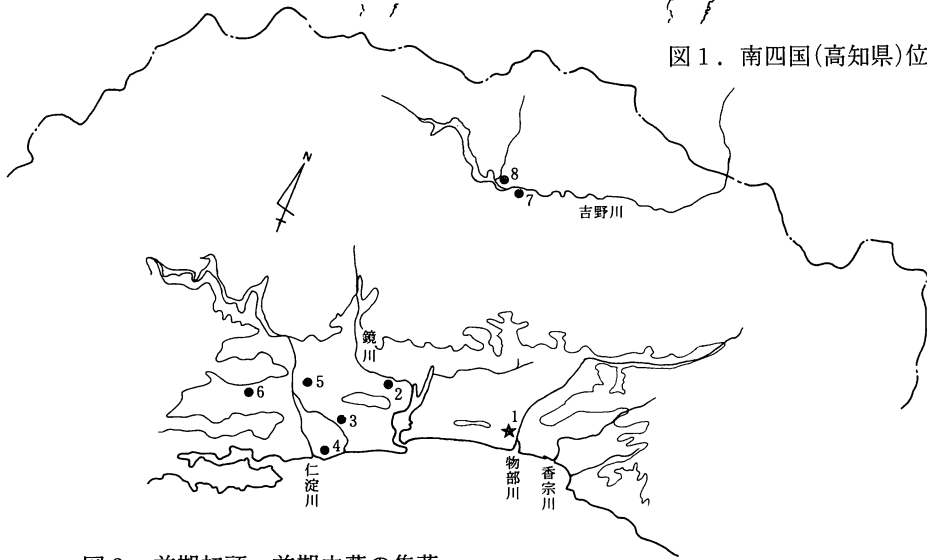


図2. 前期初頭～前期中葉の集落

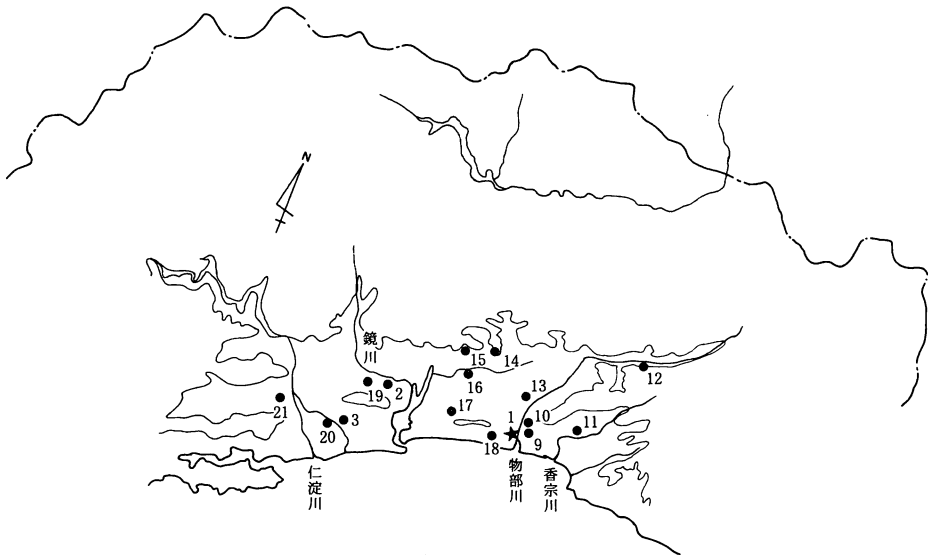


図3. 前期後葉～中期中葉の集落

南四国における弥生集落の成立と展開

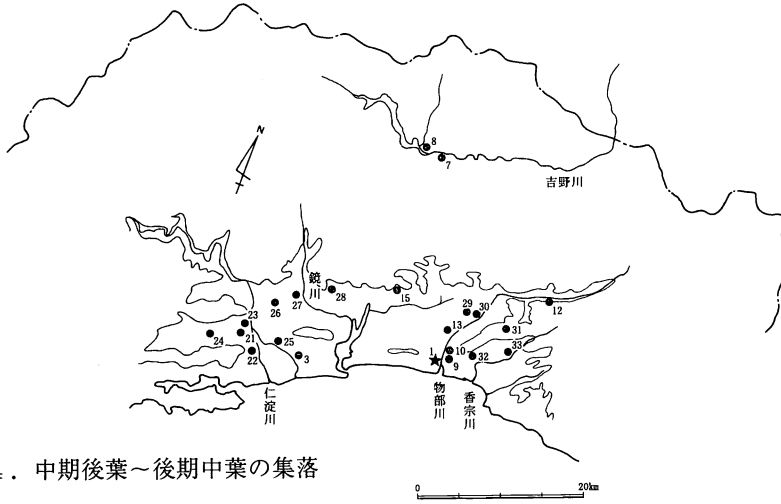


図4. 中期後葉～後期中葉の集落

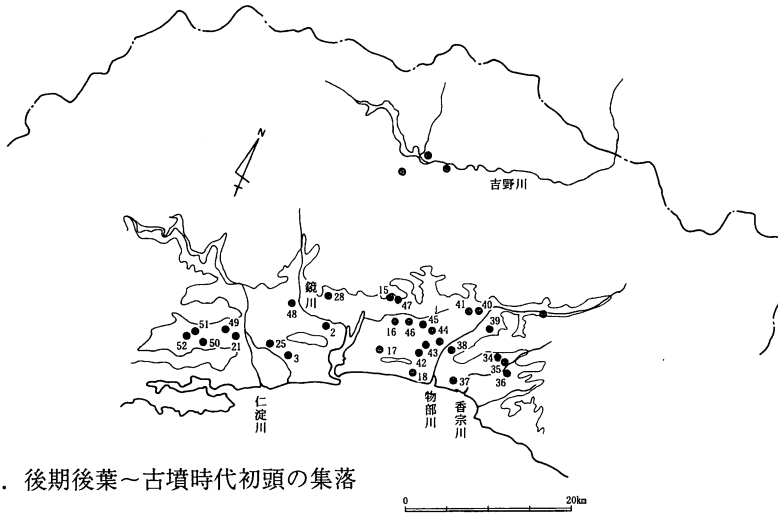


図5. 後期後葉～古墳時代初頭の集落

表1. 香長平野とその周辺部の集落遺跡名一覧

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	田村遺跡	2	神田遺跡	3	西分増井遺跡	4	仁ノ遺跡	5	八田神母谷遺跡
6	居徳遺跡	7	銀杏の木遺跡	8	松ノ木遺跡	9	上岡遺跡	10	下ノ坪遺跡
11	下分遠崎遺跡	12	美良布遺跡	13	岩村遺跡	14	口ミノウ遺跡	15	奥谷南遺跡
16	小籠遺跡	17	介良遺跡	18	里改田遺跡	19	柳田遺跡	20	山根遺跡
21	野田遺跡	22	用石遺跡	23	天崎遺跡	24	北高田遺跡	25	東江曲遺跡
26	パーガ森北斜面遺跡	27	朝倉遺跡	28	福井遺跡	29	原南遺跡	30	稲荷ノ前遺跡
31	龍河洞遺跡	32	本村遺跡	33	拝原遺跡	34	幅山遺跡	35	稗地遺跡
36	十万遺跡	37	野口遺跡	38	深淵遺跡	39	林田遺跡	40	ひびのき遺跡
41	ひびのきサウジ遺跡	42	平杭遺跡	43	金地遺跡	44	東崎遺跡	45	五軒屋敷遺跡
46	三島遺跡	47	栄エ田遺跡	48	赤鬼遺跡	49	天神遺跡	50	倉岡遺跡
51	入沢遺跡	52	徳安遺跡	53	田畠遺跡				

溝2条と数基の土坑を確認するのみである。このような状況は何に起因するものであろうか。期中中葉には田村遺跡で竪穴住居が6棟、口ミノヲ遺跡で1棟検出している。前者は円形ないしは楕円形の平面を有し、面積は30㎡未満で20㎡に満たないものもある。後者は、直径8mの大型住居である。

前期末から期中中葉にかけて遺跡数は増加するものの、集落構造を復元するに足る遺構を明らかにし得た例に恵まれていない。しかし遺跡立地や遺物の出土状況から判断して小規模で、散在的なものが多い傾向にあることは指摘できよう。前期初頭・中葉の集住的な集落構造とは異なった様相を呈している。この時期は、これまで比較的斉一的であった遠賀川式土器にかわって地域性の豊かな土器が登場する。南四国においても南四国型甕の登場に見られるように地域色が顕在化し、中期に至ってその傾向はさらに強くなる。集落構造の変化も地域性の顕在化、地域固有の文化性の中で生じた現象として捉えることができよう。

(3) 中期後葉～後期中葉

この時期は、中部瀬戸内で成立した凹線文土器が、南四国においても盛行し期中中葉まで見られた在土器様式に大きな変化が生じる。当該期、南四国中央部は中部瀬戸内からの大きなインパクトを受けるのである。田村遺跡は拠点集落として成長を遂げ、周辺部の集落にも大きな変化が認められる。まず、集落の立地の変化である。奥谷南遺跡、福井遺跡、本村遺跡など平野を望む山地中腹の斜面部に新たに集落遺跡が営まれる。平野部の遺跡においても原南遺跡や稻荷の前遺跡のように期中中葉から継続して営まれるのではなく新たに登場する例が多い。岩村遺跡や下ノ坪遺跡は前期末に登場するが、期中中葉を欠いて後期前葉に本格的な集落を形成する。当該期の集落は田村遺跡を除くとほとんどの場合、期中中葉以前の集落址とは断絶が見られる。今一つの特徴は、龍ヶ洞遺跡のように洞窟に営まれる例が見られることである。

田村遺跡では1996年から再び大規模調査が開始され、多大な成果を納めている。詳細は報告書の刊行を待たねばならないが、前回の調査と合わせて竪穴住居は400棟、掘立柱建物200棟以上を擁する大集落であることが明らかとなった。これらの遺構の7割以上が当該期に集中しており、分けても後期前半に最も盛行期を迎える。この時期田村遺跡は、南四国のみならず西日本外帯に開けた拠点集落として位置づけられる。竪穴住居の中には、張り出し部を持った直径10m前後の大形住居が登場し、掘立柱建物のなかには、掘り形の一辺が1m以上の大形建物も登場する。後者は、遺跡の前に開けた土佐渦を望む望楼の可能性もある。通常規模の掘立柱建物には、前期初頭に見られたような溝状土坑の付属する例が認められ、同様の土坑は竪穴住居にも付属するようになる。この種の土坑の機能や前期例との関連など今後追究していかなければならない。

周辺部においても先に挙げたような集落が新たに営まれるようになる。下ノ坪遺跡は、物部川を挟んで田村遺跡の対岸に立地する遺跡であり、トレンチ状の調査であったにもかかわらず後期前・中葉の竪穴住居址が12棟検出されている¹¹⁾。周辺の状況からみて70棟前後の住居址を擁する中核的な集落と考えられる。竪穴住居の中には張り出し部を有した直径10m以上の大型のものが見られ、床面及び埋土中よりガラス小玉が80点の他、鉄鏃、銅鏃、ヤリガンナ、袋状鉄斧などが出土している。集落の中で特別な位置を占めていた住居址と考えられる。また多くの竪穴住居には田村遺跡で見られた溝状土坑が伴っている。

奥谷南遺跡は、香長平野を見下ろす急峻な山地の中腹にあり、標高55m、比高差は30mを測る¹²⁾。

後期前葉に営まれた集落で竪穴住居址 2 棟と段状遺構などが検出されている。福井遺跡は山麓に近い緩斜面に立地し、やはり後期前葉に機能した集落である。本村遺跡も同様の立地にあるが、中期末葉に成立し後期前葉に盛行する。竪穴住居と段状遺構が認められる。奥谷南遺跡と本村遺跡はいわゆる高地性集落となる可能性がある。これらの集落には田村遺跡や下ノ坪遺跡で見られた大型住居や住居に付属する溝状土坑は認められない。

仁淀川右岸の高岡平野では、高地性集落であるバーガ森遺跡、平野部では北高田遺跡や天崎遺跡で集落址の調査が行われているが、物部流域に較べると少ない。北高田遺跡は、後期前・中葉に営まれた集落址であるが、これまでのものに較べて特異な構造を有している。すなわち、掘立柱建物 10 棟と竪穴住居 1 棟から構成されている掘立柱建物は、1 間×1 間～1 間×3 間の規模を有し、多くの場合建物の長軸または短軸に平行する溝状土坑が伴っている。掘立柱建物中心の集落址は、南四国では当遺跡のみである。仁淀川流域地域の特徴であろうか¹³⁾。

以上のように、後期前葉は南四国の集落址が田村遺跡を中心に最も発展、盛行する時期である。この発展の背景については、田村遺跡が、東西、南北の交流の拠点、要衝としての重要な役割を果たしていたことが考えられる。当該期、中部瀬戸内からの強い影響を受けることについては、先に述べたが、高松平野の土器が比較的多く田村遺跡や下ノ坪遺跡から出土しており、それとは反対に南四国独特の南四国型甕が讃岐や日向から出土している。当該期の交流の状況を示すものである。しかしながら当該期の東西交流を示す最たるものは、青銅祭器である銅鐸と銅矛である。弥生時代後期に至って山陰から青銅祭器が消滅した後、分布地域が南四国に移り、九州から銅矛が、近畿から近畿式銅鐸が搬入され南四国中央部で両者が重複する。田村遺跡の持つ交流の要衝としての求心性を示している¹⁴⁾。

しかしながら田村遺跡はこの直後、古墳時代の到来を待つことなく劇的な終焉を迎えるのである。すなわち後期中葉を最後に一斉に竪穴住居などの遺構が消滅する。同時に下ノ坪遺跡や上岡遺跡、周辺部の高地性集落も消滅する。この原因としては、田村遺跡や下ノ坪遺跡においては溝が洪水砂で埋もれていることから洪水あるいは津波などの天変地異も考えられる。しかし直接の原因が天変地異にあったとしても、古墳時代前夜という政治的、社会的に緊張した状況の中で生じた現象として捉えなければならないだろう。すなわち交流の要衝として果たしてきた役割の終焉を意味し、このことによってこれまで保ってきた求心性が崩壊するのである。

(4) 後葉～古墳時代初頭

拠点集落田村遺跡消滅後の南四国の集落には、立地や構造において大きな変化が生じる。かつて筆者は、当該期に営まれる集落について、立地の変化などから前代までのそれとは断絶されることを強調したが、最近の調査例によると後期中葉頃から開始される集落も存在することが明らかとなってきた。しかしながら多くは後期末或いは古墳時代初頭に新たに登場し盛行期を迎える。田村遺跡の消滅以後に、集落の再編成が行われることは間違いない。当該期の代表的な集落は、小籠遺跡、東崎遺跡、岩村遺跡、ひびのき遺跡、ひびのきサウジ遺跡、林田遺跡、拝原遺跡、西分増井遺跡など数多く挙げることができる。前代に見られた高地性集落は姿を消し、長岡台地などの洪積台地や河岸段丘上に立地する例が多い。比較的調査例の多い香宗川流域では 2 km 前後の間隔において小集落が認められる。おそらく他の河川流域においても同様の現象が見られるに違いない。したがって当該期は、集落遺跡の数は最も増加する。しかし集落の規模は縮小し、多くても同時共存の竪穴

住居20棟前後かそれ以下の集落が想定される。いわば中小規模の集落が拡散して存在しているというのが後期後葉から古墳時代前期初頭の状況である。

このような中で、比較的規模の大きな集落が先に挙げた諸例である。最早、当該期の香長平野には、かつての田村遺跡のような唯一の拠点集落は存在しない。比較的規模の大きな等質的な集落が幾つか存在し、その周辺に竪穴住居数棟からなる小集落群が付属する状況を想定することができる。集落を構成する竪穴住居址などの遺構にも大きな変化が見られるが、それらの事象についてはすでに述べたことがあるのでここでは省きたい¹⁵⁾。

3. ま と め

南四国中央部、物部川流域とその周辺部における弥生時代の集落は、大括みに言って拠点集落田村遺跡とその周辺部の集落との関係として推移する。田村遺跡は、弥生時代前期初頭から後期中葉に至るまで一貫して営み続けられる長期継続の集落であるのに対して、周辺部の集落のほとんどすべては断続的或いは短期間の営みであった。これは田村遺跡との関係の中でそれぞれの立地に適合した諸機能の担っていたことが考えられる。しかしながら前期後葉～中期中葉にかけては、小規模ながら遺跡数が増加するのに対して、田村遺跡の規模は縮小し周辺部の遺跡との格差がほとんどなくなる。当該期の南四国は、比較的等質的な集落が散在していたことを推定することができる。土器の地域色が顕在化する時期であり、この現象は周辺部においてより顕著に現れるが、これは弥生文化の浸透して行く方向とは逆の力が働いていたことも考えられる。

次の段階には新たな飛躍があり、田村遺跡は西日本外帯に開けた拠点集落に成長し、周辺部の集落においても数、規模ともに増大し、下ノ坪遺跡のように衛星的な集落も登場するようになる。この背景には中部瀬戸内からの強力なインパクトに依るところが大きいですが、伝統的に形成されて来た交流の要衝としての役割が復活したことによる。古墳時代前夜に至ると田村遺跡は突如終焉を迎え、周辺部の多くの集落も運命を共にするのである。

引用文献

- 1) 出原恵三, 2000, 土佐地域. 弥生土器の様式と編年四国編. 目耳社, 367-435
- 2) 出原恵三, 1997, 高知平野の古式土師器Ⅰ・Ⅱ期について. 小籠遺跡Ⅲ, 高知県埋蔵文化財センター, 250-255
- 3) 出原恵三, 1997, 弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷. 小籠遺跡Ⅲ, 高知県埋蔵文化財センター, 232-238
- 4) 出原恵三, 1987, 初期農耕集落の構造. 考古学研究, 34(3), 119-130
- 5) 新宅信久, 1996, パズルの一片-弥生時代早期の集落の様相-. 福岡考古, 17, 9-20
- 6) 山中三男, 1983, 高知県南国市田村遺跡群の沖積世後期堆積物の花粉分析学的研究. 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群, 第3分冊, 高知県教育委員会, 493-511
- 7) 岡本健児, 1979, 稲作開始の時期. 南国市史, 上巻, 南国市, 85-87
- 8) 高知県教育委員会, 1983, 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群, 第3分冊, 高知県教育委員会, 93-258

南四国における弥生集落の成立と展開

- 9) 出原恵三, 1990, 西分増井遺跡群. 高知県春野町教育委員会, 1-138
- 10) 高知県教育委員会, 1983, 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群, 第3分冊, 高知県教育委員会, 301-432
- 11) 小松大洋・出原恵三・池澤俊幸, 1998, 下ノ坪遺跡, II, 高知県野市町教育委員会, 1-270
- 12) 松村信博・山本純代, 1997, 奥谷南遺跡, I, 高知県埋蔵文化財センター, 23-53
- 13) 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳, 2000, 北高田遺跡. 高知県埋蔵文化財センター, 1-111
- 14) 出原恵三, 2000, 南四国の古墳時代-成立期前後の動向を中心に-. 古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集, 67-81
- 15) 出原恵三, 1993, 弥生から古墳へ-前期古墳空白地域の動向-. 考古学研究, 40(2), 119-139